

視察報告

実施日：令和5年1月12日
訪問先：国立歴史民俗博物館
出席委員：田中座長

基本情報

- 1983（昭和58）年3月に開館した**日本の歴史と文化について総合的に研究・展示する**国立歴史民俗博物館。千葉県佐倉市にある佐倉城址の一角に位置し、約13万㎡の敷地に展示面積約3万8千㎡の規模、コレクション総点数は約27万点を有する。先史・古代から現代までの歴史と列島の民俗文化をテーマに、**実物資料に加えて精密な複製品や復元模型**を取り入れ、日本の歴史と文化についてだれもが理解を深められるよう展示されている。
- **大学共同利用機関法人人間文化研究機構**のひとつとして設置され、歴史資料・情報の収集、整理、保存、調査研究、提供の一連の機能を有することを特色とする。館外の研究者も加えた共同利用や調査研究等の連携を積極的に推進することを使命とする。
- 2004（平成16）年度策定の「**国立歴史民俗博物館総合展示リニューアル基本計画**」に則り、常設展示のリニューアルを推進中。2008（平成20）年第3展示室（近世）、2010（平成22）年第6展示室（現代）、2013（平成25）年第4展示室（民俗）、2019（平成31）年第1展示室（先史・古代）をリニューアルし一般公開。第1展示室前の**プロローグ展示**で現在という視点から過去をふり返るといふ演出がある。
- 年間利用者数は約18～20万人で推移（2020年度は約9万人）。利用者層は**家族連れや高齢者層**、**学校団体利用**が多くを占める。



外観



プロローグ展示



展示室

出典：国立歴史民俗博物館

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）が目指すもの（展示の位置づけ）

- 歴博の常設展示は、日本の歴史・文化の流れの中から現代の視点で重要と考えるテーマを選び、それらの生活史に重点を置いて構成。各テーマは、館内外の研究者によって組織されたプロジェクト研究を通じて、その問題に対する一つの考え方の提案を試みたもの。ストーリー（研究）に基づいて研究者が資料から説明したい歴史的事象や、来館者にそれぞれの歴史像を掴んでもらうことを目的として展示される。
- 常設展示のリニューアルは、全展示室を、(1)生活史(2)環境史(3)国際交流の三つの基調テーマと、多様性（マイノリティの視点） 現代的視点の二つの視点を基本計画に掲げ推進している。
- 展示は、来館者が資料を見て各々の歴史観を見出すことを狙いとし、時系列の動線ではなく「テーマ展示」で構成することを重視。第3展示室や第5展示室は、どのテーマから見始めても理解できる構成としている。



出典：国立歴史民俗博物館

展示 第3展示室「近世」(2008年リニューアル)

- 展示室は4つの大テーマ（「国際社会の中の近世日本」「都市の時代」「ひととものながれ」「村から見える『近代』」）と、2つの特集展示、体験コーナー寺子屋「れきはく」で構成。
- 絵図等実物資料の他にも江戸橋広小路等ダイナミックで精巧なジオラマや複製展示を特長とし、資料展示とセットでタッチパネルとめくり式の解説シートとをケース手前に配置。文書の歴史的意義や現代語訳、見どころなど、来館者の関心にあわせて、資料を観ながら理解を深められる。
- 特集展示は定期的に展示替えを行い、最新研究成果等「いつ来ても新しい発見がある」展示を目指す。



時代の空気が感じられるジオラマ模型



特集展示のコーナー



更新が容易なめくり式解説シート



寺子屋「れきはく」、ボランティアの協力のもと、当時の手習い等体験できるコーナー

展示 第6展示室「現代」(2010年リニューアル)

- 「現代」は1930年代以降の歴史や生活文化を扱い、展示の大テーマは「戦争と平和」「戦後の生活革命」の2つと中テーマ・小テーマで構成されている。
- 第3展示室と違い空間上見学動線が予め設定されており、戦前から戦後へ時系列で展示が展開される。現代史は、歴史上の事象がどういった脈絡で起こったのかについての原因と結果の理解が必要だという理由から時系列を意識しているが、大衆の生活文化を示すテーマ展示も大切にしている。
- 空間デザインも、戦前戦中はレンガ調、戦後は白を基調とすることで時代変化を来館者に分かりやすく示している。
- 館が佐倉連隊の所在地にあることを重視して、身近な軍隊のあり様と入営する人々の様子を示すなど佐倉という具体的な地域に即して理解してもらうようにしている。



第6展示室



戦中(写真上)から戦後(下)へ空間デザインを一新し、時代変化を感じさせる



映像とジオラマを組み合わせた展示



学習のための工夫

- 実物、写真等解説グラフィック、音声や映像など複数の展示手法を組み合わせるとともに、五感で体験できる工夫もしている。
- 明確な学習動機がない来館者に対しても、「この資料だけは見てもらいたい」と優先度を示すことで関心喚起につなげている。
- 多言語音声ガイド機を導入。2023(令和5)年には来館者自身のスマートフォンを利用する音声ガイドアプリをリリース予定。
- 子どもの理解促進のため、既存の展示解説に150字程度の子供用解説パネルを追加。学校の先生にも協力いただく等わかりやすくを心がける。



子ども用解説(黄色パネル)を追加し、文字数や表現を工夫する



歩兵銃(模型)持ってみるハンズオン展示(コロナ禍のため現在は中止)

学校連携、他の博物館連携

- 小中学校の団体利用に関して、現在はコロナ禍での制限もあり、1日1学校の見学としている。学校団体利用向けに、歴博の展示と学校の授業を関連付けたガイダンスを開催している。夏休み期間には、展示物を使った授業の作り方講座を年1回開催。近隣学校や関東圏の学校が参加。
- 大学共同利用機関として、大学院生を受け入れて指導を行う特別共同利用研究員制度を設ける。他にも大学のゼミや講義での歴博利用を促す『大学のための歴博利用ガイド 歴博アクティブラーニング』といったガイドも配布している。
- 東日本大震災を契機として、江戸東京博物館と歴博が中心となって全国の歴史系博物館をゆるやかにつなぐネットワーク化を進める組織体（全国歴史民俗系博物館協議会）を設立。年に1回総会を実施する。このほかに歴博で文化庁との共催での職員研修を実施し、他館や研究者との交流など人間関係の構築に寄与している。

教育普及プログラムや広報の取り組み

- 第3展示室内にあるボランティアによる「寺子屋れきはく」のほか、子ども向けの企画で、歴史への興味関心を誘う「たいけんれきはく」を開設。土器パズルや錦絵体験など複数のプログラムを用意し、ファミリーや大人の参加も受け入れている。夏休みの「夏休みファミリープログラム」(自由研究相談室や鋳造体験等)は予約がすぐに埋まる程人気。
- 一般向け企画には、最新の研究成果を分かりやすく発表する「歴博講演会」や「歴博フォーラム」、四季折々の植物を観察して理解を深める「くらしの植物苑観察会」を開催している。
- 館広報誌を2020（令和2）年に一新。編集を外部委託し、一般書店やネットで購入を可能にした。ファッションやA I等の旬なテーマと研究内容や展示物とを絡めるなど企画内容やデザインを一般向けに広く受け入れてもらえるように、趣向を凝らしている。
- 公式YouTubeチャンネルを立ち上げ、コロナ禍で開催できなかった企画展内容の発信をした。過去の企画展アーカイブを公開できるよう準備中。他にも展示解説や講演会のコンテンツを配信をしている。



体験プログラムための空間



リニューアルした広報誌
出典：国立歴史民俗博物館



出典：国立歴史民俗博物館公式YouTubeチャンネル

公式YouTube
チャンネル

当日の質疑より

展示で複製を活用する目的について

(回答)

開館当初から「現地の資料は、現地にあるべき（もってこない）」というポリシーで活動している。

実物資料を展示できることがベストだが、歴博は国内外の研究者とともに課題を設けて調査研究を行うことを使命としており、展示はこうした研究成果を広く市民に示すことにある。したがって、展示制作に際して、展示のストーリーをつくり、資料の背景にある歴史像を見せるには何が必要か？という観点から複製など必要な資料をそろえている。資料ありきというだけで展示をしているわけではない。

複製利用のメリットは、複製製作にあたって素材の分析など細部まで調査ができるだけでなく、様々な場所にある精巧な複製を比較することで新たな研究課題を発見できる。また、資料保存という点でも、本来は期間を限定して展示するしかない資料を通年展示できる。

以上の理由から館蔵資料であっても一部は複製にして展示している。

歴博において「展示」と「学び」の関係性について

(回答)

学びとは、来館者が歴史資料を見て歴史資料と対話をすることで、来館者自身がそれぞれの歴史像を持てるようになることだと考えている。明確な目的をもって来館する人は自ら学習してくれるが、そうではない人を如何に展示に引き込むかがポイントとなる。

そのポイントは、テーマ展示の中で「この資料だけは見てもらいたい」と優先度を明確に示したり、見てほしいところを具体的に示したりして、学習につなげることにある。さらに、ギャラリートークなどで人が解説することが本当はいちばん学習につながると考えている。

その場ですぐ疑問に答えられるし、来館者の属性に応じた対応ができるからである。